5 MAY, 1989
平成元年(1989年)5月10日　教皇様の声　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
毎月10日発行　第109号

教皇様の声

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1989
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

要理教育者は福音の種播き人

要理教育は重要な仕事

私は「要理教育に関する使徒的勧告」に次のように書きました。「教会は要理教育を自分の主な任務の一つとして、常にこれに専念して来た。実際、復活されたキリストは、父のもとに帰られる前に、使徒たちに、すべての民を弟子として、御自分の命じたことをすべて守らせるようにという最後の命令を与えられた。」(1番)　(…)

イタリア及び世界には要理教育者が大勢いますし、その数は、特に信徒の中で増え続けています。私たちはこの事を教会に対する神の祝福として、また最近の世界代表司教会議のテーマであった信徒使徒職の価値の力強い確証と考えなければなりません。

人間の教育に関する全ての事柄同様、真の信仰の教育も量と質は相共に歩まねばなりません。質の高い要理教育者であること、これこそ今日この大切な仕事に携わる人々が切望しなければならないことです。教会が正式に提示している特徴と一致した質の高い要理教育者であること。こうした特徴はご存じですね。要理教育者はまず第一に〈確信をもって福音の確実さを肯定する人〉でなければなりません。「私たちは今、人間が生み出した最良のものが人間の手を離れて、人間に反抗するのを見る苦悩が不安をかもし出している、困難な世界に生きている。しかし、このような世界にあって要理教育は、キリスト信者が自らに喜びを覚え、他人に奉仕するために、世の光、地の塩となるのを助ける必要がある。無論そのためには、キリスト信者が要理教育によってその同一性を強められ、要理教育そのものも、あちこちに見られたようなためらいとあいまいさと愚かさから遠ざかる必要がある。」(前述56番)

全教会のための要理書

要理教育者はまた、イエズスが教会に委ねられ、教会が二千年の伝承の中で同化し、伝達してきた福音への、深い信仰をもつ奉仕者でなければなりません。キリストと使徒の証言が意図する真正な意義をはっきりと示しているなら、信仰の表現は本物で、解放する実り豊かなものとなるでしょう。そういうわけで、この幾年かの教皇職の間、私は「組織だった要理教育の必要」(21番)と「教理の完全さ」(30番)とを繰返し話してきました。もしも、聖書の中に含まれ、聖書から発展し、聖霊の導きの下に二千年にもわたって教会によって明白にされ、擁護されてきた信仰の遺産がどこか歪んできたとすればそれは福音に対する忠誠に背き、文化にも背く由々しい重大な罪となります。第二バティカン公会議が現代のために確実に再提義してきたように、世界代表司教特別会議が「全世界の教会のためのカトリック要理」を作成するよう求めたことは、信仰という他の何とも比較できない富の伝達を容易にすることが目的であるのは明らかです。

要理教育者は人間性についての専門家でもあらねばなりません。つまり要理を学ぶ人々の感受性や個人的な問題点などに対して極めて注意深くなければなりません。目ざす相手の疑問や期待に応えるものでなければ、たとえ見事な授業をし、美しい話をしても、何の役にも立ちません。

要理教育は完全で組織だった内容のもの、つまり欠けるところのない、意味深いものでなければなりません。生命の御言葉を与えるイエズスが、一人ひとりが必要とするもの、期待するもの、そして理解する力をお与えになった時の態度をそのまま延長した要理でなければならないのです。

最後に、要理教育者はその教えを要理を学ぶ人が生活している社会環境に適するようにしなければなりません。言い換えれば、要理教育者は神の御言葉への奉仕を、祈りと信心という純粋に内的な形のものだけに限ってはなりません。今日の重大な道徳的・社会的問題、私が回章「教会の社会教説」で再度思い起こした問題に触れていなければならないのです。要理教育者は、福音を今日の男性女性に伝えねばならないのです。

(四・二五)

現代の脅威に抗して 救いの杯をかかげる教会

1

「これは私の体である。」「これは私の血である。」(マルコ14・22、24)

この言葉は、人間の救いに関する神の御計画を新たに保証し、新しい契約を制定する言葉です。

御体と御血の秘跡を制定するにあたり、キリストは弟子たちに、ふさわしい場所を準備するよう命じました。「弟子たちと共に過ぎ越しの食事をする部屋はどこですか?」(マルコ14・14)

最後の晩餐の場所となったその部屋は、高間(たかま)と呼ばれるようになりました。毎年ローマの教会は、その司教座聖堂であるラテラノ大聖堂に集まって、聖木曜日の最後の晩餐を記念して祝います。ですからこの場所は、ローマ教会の高間になりました。

契約の血

2

私たちは今日もこの場所にいます。私たち全員がここに来ているのは、イエズスが人類に日々の糧としてその御体と御血をお与え

匿名の儀式主義

「あなたたちが罪をゆるす人にはその罪がゆるされ、あなたたちが罪をゆるさぬ人はゆるされない。」(ヨハネ20・23)　復活された主は使徒にイエズスの名において罪を赦す権能をお与えになりました。

赦し(告解)の秘跡を取り上げ、赦しを与える神イエズス・キリストの御前で、自分が罪人であると認め、罪を告白することの意味と価値を考えてきました。本日考えたいこの赦免の時は、己れの罪を認めて言明し、その罪を痛悔していることを表わし、いただいた恩寵のおかげで生き方を変える決意のできている一個人への神の答えであることは明白です。

事実、教会の中で行動する司祭の側から見れば、赦しとは人間の悪い行為に対する神の〈審判〉を表わすものです。神の御前に罪を犯したことを認め自己を責める告解者は、創造主を自らの主として認め、罪人の死ではなくその悔い改めを望まれる(エゼキエル23・11参照)御父の裁きとして〈審判〉を受け入れるのです。

私たちの和睦

この〈審判〉はキリストの死と復活に現われます。罪を知らなかった御方を「神は私たちのために罪となされた。それは私たちをその方において神の正義とするためである。」(コリント②5・21)　こうして主イエズスは「私たちの和睦」(ローマ5・11参照)と「平和」(エフェソ2・14参照)とになられたのです。従って教会は、司祭を通して独自の方法で独立した現実として活動するのではありません。教会を創設された主イエズスに根本的に従属しているのです。そして主は、様々な時に種々のになったこの秘跡の記念を更新するためです。

今年、私たちはマルコの福音書を読んで聖体制定を再び記念しました。

「弟子たちが食事をしている時、イエズスはパンを取り、祝してそれを裂き、一同に与え、『これを取れ。これは私の体である』と言われた。また杯を取り、神に感謝の祈りをとなえ、彼らに与えて飲ませ、『これは多くの人のために流される私の契約の血である』と言われた。」(マルコ14・22～24)

3 「契約の血」

――この言葉をイエズスは使徒たちに向かって仰せになりました。

そして今日脱出の書で読んだように、モーセは十二部族に「来て、主の全ての言葉と全ての法令とを告げた。……契約の書を取ってみ民の前で読みあげた」(脱出24・3、7)のです。使徒の数の十二人はイスラエルの十二部族に該当します。

イスラエルの民は、「われわれは、主が仰せられた全てのことを実行し守ります」と宣言しました。すると「モーセは血をとって民の上に注ぎながら、『これは、そのすべての言葉に基いて、主があなたたちと結ばれた契約の血である』と言った」(脱出24・7～8)のです。

契約の血、旧約の血は、犠牲(いけにえ)として捧げた動物の血で確認されました。

仲介者キリスト

4

キリストはエルサレムの高間で、御自分が神と私たちの間にたつ新しい契約の仲介者であることをお示しになりました。キリストは「御自分の血をもってただ一度だけ至聖所に」入り「(…)永遠の贖いを成し就げられた」のです。(ヘブライ9・12)

新しい契約の仲介者であり、来たるべき善き事を司(つかさ)どる大司祭。

「永遠の霊によって、汚れのない御自分を神に捧げられた」キリストが、「私たちの良心を死の業から清めて、生きる神に奉仕させる」のです。(ヘブライ9・14)

キリストは新しい永遠の契約を、御自分の血でもって仲立ちなさる御方なのです。

「善き事の大司祭」は、「選ばれた人々に約束された永遠の遺産を受け継がせるために」来られました。(ヘブライ9・15)

5

血とはキリストの御体の御血です。そして御体は、その御血の神殿(聖堂)なのです。キリストが御体を神に捧げるために十字架上で殺された時、その御血は流れ出て、完全な犠牲となり、燔祭が完成されたのです。

「まことに私は言う、神の国で新しいものを飲むまで、私はもうぶどうの実の汁を飲まぬ。」(マルコ14・25)

最後の晩餐の高間で制定された、パンとぶどう酒の形の下での犠牲によって、キリスト――来たるべき善き事の大司祭――は「唯一度だけ至聖所にお入りになります。」

主は私たちをここに導いてくださいます。

御体と御血の秘跡は、神御自身の内にある永遠の目的地に向かって、人間が進んで行く長い旅、はかない物事に浸されている人生、すたれていく人生から永遠の生命へと私たちを連れて行ってくれる、旅路の秘跡であります。

証人となること

6

私たちは今日再び、聖木曜日と同じようにこころテラノ大聖堂に集まっています。けれども、今回は最後の晩餐の高間の扉を閉じた部屋を思い出させるバシリカ(大聖堂)の内側でなく、外にいます。

ローマの大通りをいくつも通り、歩いて行かねばなりません。キリストの御体と御血、御聖体が旅路の秘跡であることの証人となるためです。出発の用意は整いました。この長い旅路を契約の神が導いてくださるのです。

「私は天から下った生きるパンである。このパンを食べる人は永遠に生きる。」(ヨハネ6・51)

人間の旅路が永遠の生命への旅路であることを、私たちは全ての人々に伝え、共同体の中でその証人になりたいのです。

この街の真っ只中――いくつもの通りや建物、はかない物事に向かって様々な人間活動の行われているこれらの場所――で、私たちはキリストの御体と御血における永遠の生命の秘跡について話したいのです。

7

私たちは契約の証人になりたいものです。

御自分の姿に似たものとして人間をお創りになった神は、初めから契約の神でいらっしゃいました。

アブラハムの神、モーセの神、イエズス・キリストの神。

御聖体はキリストの御体と御血の契約――永遠の契約の秘跡なのです。

これは全ての人を包む契約です。この御血は全ての人に届き、全ての人を救います。

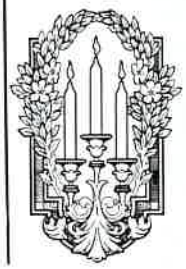
神を忘れ、神を見ず、無関心、あるいは敵意をもつ人々、そういう全ての人々の真っ只中で、私たちは叫びます、「一人の人間である私は、私に与えてくださった全ての物のお返しに、何を主のもとに持って帰ろうか」と。

陰謀に満ちた歴史、現代の脅威の数々、そして人間の心と理性と良心のさすらいよりもまず第一に、教会は「救いの盃をあげ」(詩篇115・13参照)御聖体を掲げるのです。

説教・講話・書簡等の抄訳

イエズス・キリスト 真の神シリーズ ③

神性と人性



環境の中で贖いの秘義を現存させるために教会に住み、行動なさいます。福音書を読めば、罪の赦しのためにキリストに代わって使徒において、教会が「派遣されている」ことが明らかになります。「父が私を送られたように私もあなたたちを送る」と、復活された主イエズスは仰せになります。そして彼らに息を吹きかけ、「聖霊を受けよ、あなたたちが罪をゆるす人にはその罪がゆるされ、あなたたちが罪をゆるさぬ人はゆるされない」と言われました。(ヨハネ20・22～23) 司祭の人間の姿のうしろ、あるいは内側に、「罪をゆるす力をもつ」(ルカ5・24参照) 主が、そしてこの目的のためにカルワリオの犠牲と復活の勝利の後、「神の霊」(ローマ8・9参照) を「受け」(ヨハネ7・39参照)、そして「遣わされた」(ヨハネ20・22参照) 主が、姿は見せずに活動しておられるのです。

根本的に賜である赦し

惨めさと絶望から私たちを贖うために神が介入なさることは賜であることを、どんなに強く主張しても過ぎることはありません。赦しは罪人が神の御前で要求できる〈権利〉ではありません。赦しは根本的には賜なのですから、その赦しをいただいた人は、言葉と生き方で感謝を表わすべきものです。

従って教会が一人ひとりの罪人に与える赦しの具体的で個別的な特性を強調しなければなりません。遠くにおいでになる抽象的な神を考えるだけでは不十分です。神がキリストにおいて実現させ、教会の中で続いている計画は、人間が必要とするものにぴったり合います。神は私たちが、「キリストの御名において」働く兄弟姉妹の祈りと善い行いに支えられた人間であるようにと望まれました。これが神の恵まれる慈悲を保証することになります。赦しという個別的な性質に関しては、教会の不変の伝統に従って、回勅(『人類の贖い主』)や、その後も度々個別の赦しの〈義務〉を主張するだけでなく、個個の罪人が繰り返しの利かぬ唯一の存在としての自分を受入れてもらう権利についても強調してきました。罪に対する責任ほど個人的で避けられないものはありません。また、悔い改めと神の慈悲を求める希望と祈りほど個人的で避けられないものもありません。どの秘跡も人間一般に向けては語られず、〈一人ひとりの個人に向けて〉語られています。すなわち、洗礼では「私はあなた(単数)に洗礼を行う」であり、堅信では「聖霊のしるしを受けなさい」(単数) 等です。同じ考えで「私はあなた (単数) にあなた (単数) の罪を赦す」ことがわかります。

しかし、ある種の〈個人主義的儀式主義〉に、またもっと有害な〈匿名の儀式主義〉が続くことのないように絶えず警戒している必要があります。罪と赦しの共同体的な面は、共同の儀式と一致するものでも、共同の儀式によって成し遂げられるとは限らないのです。一人ひとり個々に告白することによってカトリック性 (普遍) にも宇宙にも開かれた心を持つことができます。逆に、共同の面を強調するあまり、匿名の集団に埋もれ、かえって個人主義に閉じこもってしまうこともありうるのです。

蘇えられたキリストの教会への賜であった (ヨハネ20・19～20参照) 「平和」の喜ばしい経験を再体験するために、今日の信者が赦しの秘跡の価値をもう一度見出すことのできますように。

(三月二八日)

キリスト論をめぐって開かれたニケア・コンスタンチノープル公会議は私たちの信仰の土台をなす真理を明確に表わし、信仰宣言において、イエズス・キリストは真の神であり真の人、神性においては神と一体であり、人性においては私たちと同質であることを確証しました。しかし、キリストの神性と人性の真理について公会議が説明した後、完全な神であると共に完全な人であるキリストの一性(一体性)の正しい理解に関して論議が起こりました。

この論議は託身(受肉)の秘義、つまりキリストの受肉と処女(おとめ)マリアからの誕生がもつ本質的意味に関するものでした。三世紀に、マリアはテオトコス(神の母)と呼ばれていました。この呼び名は (他にも表われますが)、最も古いマリアの祈り、祈禱書の「終業の祈り」に表現されています。「天主(神) の聖母の御保護によりすがり奉る。いと尊く祝せられ給う童貞……」教会はこの祈りを今日までずっと答唱詩篇で唱えてきました。この表現が見出される最古の文献はエジプトで発見されたパピルスに記され、三世紀から四世紀にかけての頃のものと推定されています。

五世紀の始めにネストリウスと彼に続く人々は、テオトコスという呼び方に異議を唱えました。マリアはキリストの母と呼ばれるべきで、神の母とは呼ばれないと主張したのです。この主張はキリストの一性(一体性)の問題に対するネストリウスの結論であったといえます。彼によると、一人の人――お告げから処女マリアの胎内に存在し始めた地上の人――の内に神性と人性が一致することはないと考えます。神の御子を御父より劣ると考えるアリアニズムとも、キリストの人性を単なる外見にすぎないと考えるドケティズムとも異なり、ネストリウスは聖なる存在、例えば神殿のように、キリストの人性の内に特別に神が現存されると説きました。つまり、キリストの内に神性と人性の二つの本性だけでなく、ペルソナも二つ存在すると考え、人間であるキリストの母マリアを神の母とみなすことも呼ぶこともできないと主張したのです。

ネストリウスの考えに反対して、エフェソ公会議(431年)は啓示によって示され、キリスト教の聖伝、つまり聖なる教父たち(DS 250～266参照) によって確証されたキリストの一性を確認しました。キリストは永遠のみことば、神よりの神、永遠より御子として御父より「生れた」方、時満ちて処女マリアより誕生した方であることを表明したのです。キリストは一つの存在なのですから、キリスト教の祈りと「教父たち」の教えの中で表現されてきているように (DS 251参照) マリアは当然「神の母」の称号を受けるべき御方なのです。

エフェソ公会議の定義は後に「合同信条」(433年) として公布され、それによって長い間続いていた論争に終止符がうたれました。「私たちは次のように宣言する。すなわち神のひとり子である主イエズス・キリストは完全な神であり、理性的霊魂と肉体を備えた完全な人間である。神としては、この世の前に父から生れたキリストは、終わりの時に我らのため、我らの救いのために処女マリアから人間性を受けて生れた。神性においては父と同質であり、人間性においては我らと同質である。こうして二つの本性の一致が行われた。こうして我々は唯一のキリスト、唯一の子、唯一の主を宣言する。この混合することのない一致のために、我々は聖なる処女が神の母 (テオトコス) であると宣言する。神であることばが受肉し、人間となって、受胎の瞬間より、彼女(マリア)から

不変の教え

神が聖別し、力を与える

受けた神殿を自身に一致させたのである。」(DS 272)ここに、みことばによってマリアの胎内でペルソナが一致して実現した人間――神殿の驚くべき概念が示されています。

「合同信条」として知られている文書は、アンティオキアの司教ヨハネとアレキサンドリアのキュリロスの間の書簡のやりとりの結果生れました。彼らはそれにより、教皇シクストゥス三世(432～440年)から栄誉を受けました。そこではすでに唯一の主体、つまりイエズス・キリストにおける二つの本性の一致について語られていました。しかし、いわば一人のキリストにおける二つの本性の結合と混合を唱えたエウティケスとキリスト単性論者が現われたがために、新たな論争が起こったので、カルケドン公会議が数年のちに開かれました(451年)。この公会議では大聖レオ教皇(440～461年)の教えに従って、二つの本性の一致を実現させる主体に関して明らかにするため、「ペルソナ」という言葉が導入されました。これこそキリスト論発展の行程において画期的なことでした。

教義上の決定を公式化するにあたり、カルケドン公会議は、ニケア・コンスタンチノープルの定義を繰返すと共に、エフェソのキュリロスの教え、並びに『フラヴィアヌスへの書簡』を用いました。「古いローマの司教レオがエウティケスの誤謬を滅ぼすためにフラヴィアヌス大司教にあてた書簡を、ペトロの信仰宣言に合ったもの、邪悪な教説に対して正しい教義を教えるものとして受入れる。」(DS 300参照)「われわれはみな教父たちに従って、心を一つにして次のように教え、宣言する。われわれの主イエズス・キリストは唯一の同じ子である。(…)同じ唯一のキリスト、主なるひとり子であり、二つの本性において混合、変化、分割、分離せずに存在する。この結合によって二つの本性の差が取去られるのではなく、むしろ各々の本性の特質は保存され、(両方の本性は)唯一のペルソナ(位格)と唯一のヒュポスタシス(自存者)にともに含まれている。また存在するのは二つのペルソナに分離し分割されたものではなく、唯一の同じひとり子、神のみことば、イエズス・キリストだけである。これは預言者たちが彼について告げ、イエズス・キリスト自身がわれわれに教え、教父たちの信経がわれわれに伝えたことである。」(DS 301～302参照)

これは聖書と聖伝が伝えるキリストの秘義に対する明白で力強い信仰の統合です。そこでは一般に使われている言葉として本性とペルソナという表現と概念が用いられました。公会議の表明の後、この語は哲学や神学の専門用語に格上げされたのです。しかし公会議は、この概念や言葉を特定の哲学体系と関係のない、日常語から採用したのでした。公会議の教父たちの言葉の選択における的確性に注目しなければなりません。ラテン語の「ペルソナ」にあたるギリシャ語「プロスポン」(ギリシャ語原文に使われている)は、人間の外的・現象的側面を表わす語(本来の意味は「芝居のマスク(仮面)」)なので、教父たちはこの語と共に人間の存在論的な面を明確に示す別の言葉、すなわち「自存者」(ヒュポスタシス)も用いたのです。

時には殉教の試練さえ受けつつも、(信仰)証言のために多くのキリスト教徒が光と力を見出した公式文の言葉に合わせて、私たちも救い主キリストへの信仰宣言を新たにしなければなりません。

司祭の役務(聖務)は、人間としての司祭自身と同じではありません。けれども救いの歴史を見れば、神が特別の使命に人々をお呼びになる時、召された人々が受ける使命と召された人の人柄との間に親密な関係のあることがわかります。モーセは「人が友だちに語るように」(出エジプト33・11)神に話しますが、新約の使徒や司祭にとってこの親しさは、キリストと一体化するところまで及びます。このように深い相互関係があるのは、神が呼び招かれるだけではなく、聖別しその使命を果たす力をお与えになるという事実によります。聖別はその人の全存在のレベルに触れ、浸透するのです。

司祭職において生活と聖性を一致させる方法は、自らを司祭職に合わせるよう調整することと、一日一日をより一層はっきりと強く神との霊的な同一化の過程を実行していくことにあります。(…)

聖なる奉献によって使徒の協働者となることは、ドン・ボスコの強い確信でした。それが彼をその使命のために強くさせ、決意させたのです。さらに司祭の仕事、人間としての司祭の仕事、および教えはキリストの行いを現存させ、それを保ち続けて行くことにあります。礼拝、償い、宣言、あらゆる手段を使って御父の至上の愛を人々に知らせ、受け容れさせることを一層深く理解させたのも、その強い確信だったのです。

彼にとって、神に捧げる時間と、少年達や活動、使徒職の義務に当てる時間には何ら区別はなく、主の命令と犠牲における観想に全てを完全に献げることによって、神のなされる聖化の活動に没頭したのです。

司祭は、叙階の秘跡の力の当然の結果として「キリストの代理者」になったこと、「神の奥義の管理者」(コリント①4・1)であることをはっきりと、そして絶えず意識していなければなりません。自分自身及びキリスト信者全員の秘跡を尊重する生活が第一となるよう毎日心を遣って専念するのでなければ、自分をこの世で主の現存の運び手にしてくれる奉献の生活をおくることはできません。

司祭は神の生命を人々に伝えます。今日この真理を力をこめて言わなければなりません。司祭は弱かったり不完全であるかもしれません。確かに主の代理になるよう司祭をお召しになった主の信頼に足るにはほど遠いところにいるでしょう。しかし、司祭の力と富はおもに人々を聖化し神化し、神によって生きるために与えられています。(証聖者マキシムス書簡31 PG 91―626)

神に満ちる：内的生活において、聖体において、度々行う告解において、神で充満していること。魅惑的な罪へと誘う誘惑の声を無傷で退けること。

神を伝える：三位一体の神を人々に伝えること。日曜日と祝日を祝う正しく用意された御言葉と聖体の食卓に人々を引きつけること。潔めと内的戦いのための聖なる手段である告解を実行するよう勧めること。生きていくため犠牲を捧げ、自己を与えること。そして人々に、家庭における聖性への理想を提示すること。家庭では、生命と犠牲、自らを与えること、快楽主義に対する戦いが見られるはずです。若者の間に高邁な理想の霊感を吹きこむこと、召し出しを育てること。

司祭職において、奉献と宣教(使命)とは、両極ではありません。この二つは一致というすばらしい恩寵を真にもたらす司牧者の愛徳の、より高度な均衡が基礎となっているのです。

実際司祭にとって使命は、まさに奉献の一部をなすものであり、使命と司祭職は内なるものが実践の形となって現われたものです。

主は清め、招かれます。使徒の行動は司牧者の愛徳の結実なのです。

(八八・九・三)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部八十円　送料実費
■一年予約九〇〇円　送料六〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要
郵便振替　神戸　3-72393